〈高校生の部　優秀賞・福井新聞社賞〉

博物館と赤いランドセル

福井県立藤島高等学校　政田　鮎香

自宅から歩いて五分程の所に博物館がある。かつて県立の工業高校だった校舎の一部を利用して作られた県立の「教育博物館」だ。

ここでは幕末の寺子屋から現代までの学校教育の変遷を見ることができる。この博物館では来館者がガラスケースの中の展示品を眺めるだけでなく、教科書や学級日誌、学校で使われていた物など、実物を手に取ってみることができる。また、映画のセットのような昭和三十年代の教室風景を再現した展示室は人気の場所だ。古い小さな木製机と椅子がずらりと並ぶ。これまた木製の古い足踏みオルガンや、廃校の小学校から持ち込まれたアップライトピアノは誰でも自由に弾くことができる。ピアノには卒業生有志であろう寄贈者の名前が金文字の連名で記されていて、思いのほかブライトな音色を響かせる。

この博物館ができた時、私は小学校四年生だった。開館当初、私はさほどこの博物館に興味はなかった。私がこの場所を度々訪れるようになったのは、祖母との散歩がきっかけだ。私は小学校六年生の卒業式直前に始まったコロナ禍の長い休校で、友人と遊ぶ機会や出かける場所も失い、愛犬の散歩に時間を費やしていた。同居の祖母もまた通い始めたデイサービスが休止となり、いつしか私は祖母と連れ立って近所を散歩することが日課になった。この頃博物館は休館だったが、元学校らしく桜が満開の下を私たちは毎日散歩した。コロナがおさまったら一度この博物館に入ってみようと話しながら。桜が青葉に生い茂る頃、学校や博物館が再開された。以降、私は祖母や母と度々休日や夏休みに散歩がてら博物館に足を運ぶことになった。そしていつしか高齢の祖母にとって、屋根のある空調のきいた元校舎は、暑い夏や寒い時期の散歩にうってつけの場所となった。

祖母は太平洋戦争真只中の昭和十八年に山奥の小さな村の国民学校に入学、終戦の時は三年生だった。そんな祖母にとって、この博物館は子ども時代を懐かしむ格別の場所だった。大きな声では言えないがこの博物館、平日は来館者もまばらで閑散としている。だから多少声を出しても人目を気にすることはない。祖母はそんな館内を手押しカートでゆっくりまわり、時々腰かけては戦前の教科書を手に取り声を出して読んだり、流れる唱歌に少し調子の外れた声で合わせたり、ゆったりとした時間を過ごした。

ある日、展示品の小さな赤いランドセルを手に取って笑いながら話してくれたことがある。入学前、彼女の父は近隣の町を探し回りランドセルを手に入れてくれた。赤いピカピカ

のランドセルを背負い入学した女の子はクラスで祖母一人だったそうだ。でもその自慢のランドセルは数回雨に打たれただけで表面の皮がはがれ、厚紙の芯がむき出しになってしまった。戦時中の物資不足で何の皮で作られたかわからない粗悪品だったことを面白おかしく話してくれた。この場所に来ると、戦中戦後の頃のことが一気によみがえり、祖母の話は尽きない。疎開児童であふれた小さな教室。芋や南京の葉で一面覆われた運動場。日常茶飯事のお弁当盗難事件。「タイショウホウタイビ」（大詔奉戴日、毎月八日の戦勝祈願日らしい）には米飯ではなく代用食の弁当持参が規則なのに、その重要な日にうっかり白い米の飯を持って行き、こっぴどく怒られたこと。教科書に言われるままベタベタ墨を塗ったこと。かわりに先生お手製のわら半紙に刷られた薄い教科書。祖母の話はいつも「あんなにおぞい（悪い）時代はない」でしめくくられた。祖母は「おぞい」体験と記憶をあえて嗤い、その語り口は滑稽だった。

祖母と同年代の高齢者の多くは多少の違いはあるが同様の体験をしただろう。ただ個人の記憶は時として個々の経験や思い、環境の違いから必要以上に美化や、逆の場合もありうる。そして個人の記憶は言葉で語られ文字に記されることはあっても、なかなか継承されない。戦争に関していえば継承にスポットがあてられるのは「語り部」が語る戦争の惨禍だ。現代に生きる私たちには貴重な事である。そして戦争の経験者が少なくなる中、歴史の風化を食い止めようと若い世代が「伝承者」として動き始めている。ただ、祖母のように幸い空襲にも遭わず過ごした田舎の村の女の子にも「戦争」はあった。この博物館は近代以降のあらゆる世代の子どもにとって「学校」が「日常」であることを再認識させてくれる。そして時代を隔てた個人の日常の記憶が、現代っ子の私の意識とクロスする。

現在祖母は長い入院生活で、昔の記憶もおぼろになってきている。先日祖母の小学校時代の写真を見つけた。校舎玄関前での集合写真だ。戦後まもなく撮影されたのだろう、玄関上の看板はNational School の英文字。おかっぱ頭の少女が生真面目な顔で私を見つめている。明日の面会にはこの写真を持って行こう。祖母の笑顔が楽しみだ。